二ノ宮高校野球部奮闘記

S．S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
二ノ宮高校野球部奮闘記

【Ｎコード】
Ｎ３６３８Ｄ

【作者名】
Ｓ．Ｓ

【あらすじ】
主人公谷川隼人は甲子園出場を夢見て広島県内屈指の野球強豪校、大田実業の受験するが失敗、まったくの無名校、というより正確には去年まで女子校だったため野球部そのものが存在しない二ノ宮高校へ入学することになってしまった。しかしそこから始まる高校球児達の熱い物語。目指せ、甲子園！！

プロローグ（前書き）

このお話は実在の学校、団体、人物などとは一切関係ありません。できるだけ同名のものは避けますが完璧にすることは無理です。ご了承ください。

プロローグ

＜プロローグ＞

「……、２３５６、２３５７、２３６４、２３６８、２３７０、２３７２……、２３７２？」

谷川隼人（たにがわ はやと）は呆然と立ち尽くした。

今日は広島県立太田実業高校の合格発表の日だ。

この高校の野球部は県内最強、公立校ながら毎年のように甲子園に出場していて、全国でも優勝回数４回を誇る。

また、この高校は勉強のレベルも悪くはなく、なんとしてもここの野球部に入りたかった俺はこの日に向け必死に勉強してきたのだが結局今までしてなかった分が祟り、俺の受験番号２３７１の数字はなかった。

「はぁ…、新川（しんかわ）も豊島（てしま）も落ちたし…。ってことは二ノ宮（にのみや）しか行くとこなくなっちまった…」

二ノ宮高校は広島市の北の方にある私立高校。去年まで女子高だったところで、今年から男女共学に変わった高校だ。

当然のことながら野球部はない。

これまで甲子園のマウンドを踏むことを夢見て野球をしてきた俺にとってここへ進学することはその夢が手の届かないところへ、というより見えないところへ行ってしまうということなのだ。

「これで甲子園は夢のまた夢か……。やっぱ現実はあまくねぇな…。」

俺はぼんやりと空を見上げた。初春の寒空に鳥が一羽、ゆっくりと

飛んでいた。

プロローグ（後書き）

感想・意見などありましたら是非お願いします！
まだまだ概要しか決めていないのでどんどん取り入れていきたいと思っています。
また、まだまだ文章を書くのが下手なので、皆さんご指導をよろしくお願いします！

第1話　二ノ宮高校入学

ジリリリッ！
朝6時、いつものように目覚まし時計が鳴る。
俺はさっと布団から出てトレーニングウェアに着替えて走りに行く。
この毎朝走る習慣は小学校4年生の時から始まった。
少年野球クラブのコーチにピッチャーになりたいと言ったらとにかく毎日走って体力つけろと言われそれを今まで忠実に守ってきた。
走るコースは少しづつ伸ばして今は俺の家から3キロ離れた村上神社まで行って帰る大体30分くらいのコースだ。
川沿いの道を走っているとまだ少し肌寒い朝の空気が心地よい。
眠気覚ましにはもってこいだ。
神社に着くと神社の階段を5往復して折り返す。
帰り道、空を見上げるとよく晴れている。
今日もいい天気になりそうだ、そんなことを思いながら最後の団地の坂を上っていった。

今日は少し調子が良くていつもより5分ほど早く家に着いた。
そしてそのまま犬2匹の散歩にまた出かける。
犬は双子の柴犬でやっと1歳になったばかりの奴らだ。
名前は大人しくて賢いのが「ゴン」、とても活発（悪く言えばうるさいだけ）でアホなのが「クッキー」だ。
この2匹は去年妹が犬を欲しがり西条の街のペットショップに見に行った時に買った奴らだ。
本当は1匹だけ買うつもりだったが妹が片方選ぶともう1匹の方（今のクッキーのほうだけど）がすごいうるうるした目で俺を見てきてすごくそつがかわいそうになって、俺の小遣い全部（お年玉もかなり使って）出して買ってしまったのだ。

今となればなぜこのやかましいアホに８万も…と思うがまぁ仕方がない。

今日はかなりゆっくり散歩をしたため帰ると時計は７時半を過ぎていた。

「隼人！何ゆっくり散歩してたのよ！今日入学式でしょ？早く支度しなさい！！」

２匹を鎖につないでいると母さんが窓から体を乗り出して叫んできた。

あぁ、そういえば今日から高校生か、と思いながら家に入って準備を始めた。

学校に着いたのは集合時刻ギリギリの８時３５分だった。

全員座って若干緊張した感じで静かに座っていた。

俺が教室に入るとほぼ一斉に俺を見てきて俺はかなり焦った。

いや、別にそんな珍しいもんでもないだろ…、と思いつつ軽く頭下げて俺の席（一つだけ空いてたからすぐわかった）に座った。

この教室に入っての第１の感想は男子があまりにも少ない、ということだ。

ざっと見た感じでは女子の半分、いや３分の１かもしれない。

やっぱり去年まで女子高だった学校に入る男子なんてそんなにいないみたいだ。

俺が座ってすこしするとチャイムが鳴り、先生が入ってきた。

担任は男だった。

背は軽く１８０センチを超え、体つきはすごくがっちりしていてス

ーツの上からでもそれがわかる。
顔もかなり厳つい顔だ。
結構迫力のある奴だなぁと思って見ていると見た目そのままの声と口調で話し始めた。

「俺がこのクラス、1年2組担任の岡野弘毅(こうき)だ。32歳独身、趣味はボクシング。見ての通りかなり怖い顔したおっさんだが根は優しい、と自分では思っている。1年間よろしくな」

こんな筋肉マンが元女子高にいるとは…。
俺のイメージではちょっときれいな女教師か優男が出てくるもんだったが実際は普通の高校と変わらないようだ。
ある意味普通の高校よりもやばそうな奴だが。
まぁ、なかなか面白そうな奴だしこのクラスもなんとなく馴染めそうな感じだ。
とりあえずそれなりに充実した1年になりそうな気がした。

しかし心配なのは部活のほうだ。
うちのクラスも男子がかなり少ないし、多分他のクラスも似たようなものだろう。
人数が集まるかどうかが問題だ。
集まってもまったくの素人ばかりでは…。

こうして期待と不安のもと俺の高校生活はスタートした。

第1話　二ノ宮高校入学（後書き）

感想をお待ちしています！些細なことで構いません。

第2話　運命の出会い

入部の手続きが始まったのは入学してから1週間が経ってからだった。
俺は入部届けをもらうとすぐ次の日に入部届けを出しに行った。
「失礼します、1年2組の谷川です。川本先生いらっしゃいますか？」
職員室に入るときは必ずクラス、学年、氏名を言いようのある先生の名前を言うのがルールらしい。
中学校のときもこうだったがいちいち面倒くさい。
まぁ職員室なんて遅れた提出物を出しに行くぐらいで、ほとんど近づかないし（近づきたくないし）別にいいが。
「俺が川本だ。なんの用だ？」
そう言って近づいてきたのはジャージ姿の男の先生だ。
歳は見た感じ３０代で、背は普通で１７０くらい。
体育科の先生らしくそれなりに引き締まった体つきだ。
「野球部の入部届けを出しにきました。よろしくお願いします」
俺は持ってきた書類を渡した。
すると先生はさっと目を通して、
「早速入部か、嬉しいねぇ。すぐにでも部として活動したいがまだ届けてきたのは君だけで練習も何もできない。部室の鍵を借しておくから人数集まるまでしばらくは自主練をしておいてくれ」

やっぱりか。
さすがに今年から始まるできるかどうかもわからない部活に初日から出しに来る奴はいないみたいだ。
俺は鍵を受け取って職員室を後にした。

俺はバッグを持って部室に向かった。
体育館の前を通りかかると女子バレー部やバスケ部の掛け声やボールの跳ねる音が聞こえてくる。
ここは女子バレー部が強いことで有名らしく、かなりハードな練習のようだ。
掛け声に混じってコーチの怒声や檄を飛ばす声が聞こえてくる。
他にも演劇部の発声練習や卓球部のピンポン球が跳ねる音も聞こえてきた。
どこの部もしっかり部活をしているんだなと当たり前のことを思いながら体育館を通り過ぎた。

部室はわりと新しいらしく、床はきれいだった。
道具はまだほとんどビニール袋に入っていて段ボール箱も部屋に積み上げてある。
とりあえず俺は着替えてボールをさがした。
段ボール箱の中を見ると、新品の道具に混じってどこかの高校のお古と思われるかなり使い込まれた感じの大量の硬式ボールやキャッチャーのレガースも入っている。
それらを整理しながらふと棚の上をみるとかなり古い硬式ボールが飾ってあった。
サインが書いてあるがよく読めない。
とってみようかと思ったがかなり高いとこにあって手が届かないのでやめた。

俺は古いボールを1ケースもってグランドに入った。
かなり広いグランドで、レフトの向こうは山だがホームから８０メートルはありそうだった。
ライトやセンターはサッカーのグランドがあるがそれでも十分な広さがとれそうだ。
しかし、今はサッカー部もまだ活動しておらず、陸上部が遠くの砂場のほうで幅跳びや棒高跳びをしている以外人はおらず、閑散としていた。
俺は予想以上に広かったグランドに満足しながらサードの横にあるベンチのところまで行った。

ベンチに腰掛け、グランドを眺めた。
バックネットは当然ちゃんとあるが、さすがにホームベースやマウンドはまだ整備してないらしい。
グランドもまだ固そうだし、部活がちゃんと始まってもしばらくはグランド整備に費やされるだろう。
さて、何をしようかと思って何気なくバックネットの方にふらっと行ってみるとそこにはマウンドが作ってあった。

グランド整備さえできてないのになぜブルペンだけ…？と思ったがありがたく使わせてもらうことにした。
ホームベースをベンチから持ってきてネットをその後ろにおいて投げ込みをはじめた。
俺は小学校の少年野球クラブ時代からずっとピッチャーで、もちろん高校でもやる。
他のポジションもそこなりのよさがあるのだろうが、俺はピッチャーしかする気がしない。
このマウンドで投げる気持ちよさというか、そういう感覚は他のポジションにはないだろう。

それにしても久しぶりにマウンドで投げる。
去年の夏引退してからは受験勉強ばっかで、終わった後は近くの公園で壁に向かって投げるだけだったから半年以上マウンドで投げてなかったことになる。
なにか懐かしい感じだ。

一箱投げて、ボールを拾いに行こうとすると後ろに視線を感じた。
振り返るとそこには1人の男子生徒が立っていた。

「ナイスピッチング」

彼はそういってこちらに歩いて来た。

「俺は古谷拓磨（ふるやたくま）。忠海東（ただのうみ）中から来た。ポジションはキャッチャーだ。よろしくな」

第2話　運命の出会い（後書き）

野球用語が少し出てきましたが、分からない方は多いのでしょうか？少しずつルールとかについても解説を後書きとかでしていこうかなと考えたりもしています。
このような用語などの点も含めてご意見・ご感想を待っています。それらを下にどんどん改善してよりよい作品作りに励んでいきたいと思っています。よろしくお願いします。

第3話　二ノ宮高校野球部始動！

古谷と会ってから1週間はまったく部活がなく、俺達は毎日投げ込みをした。
あいつはなかなか上手く、構えもゆったりしていてすごく投げやすい。
いつもとそんなに変わらない投げ込みだが、なにか感覚が違いすごく投げるのが楽しかった。

それから1週間後、ようやく部活が始まった。
人数は9人ギリギリ。
見たところ野球をやっていた奴はあまりいない。

しばらく部室で待っていると顧問の川本先生が2人の人物を連れてきた。
2人とも野球とは縁遠そうな人で、1人は若い女の人でもう一人はどこにでもいそうなおじいちゃんだ。
全員が一体誰？という顔をするなかで先生が話し始めた。

「このお二人はうちの高校の新しい監督とコーチになって下さる方達だ。ちょっと自己紹介をしてもらおう。すいません、監督からお願いします」

するとおじいちゃんの方が前に出てきて、

「わしがこの高校の監督になる、横道忠雄（よこみちただお）じゃ。今年で８４歳になる。しかしまだまだ現役じゃよ、そんなに心配せんでもええけんの（心配しなくてもいいからな）」

唖然としていた俺の顔を見て一言加えた。
俺は慌てて顔を引き締める。
しかし横道監督といえば名監督中の名監督。
尾道工業高校を率いての春・夏・春の3連覇をはじめ三原工業高校・忠海水産高校などで春5回、夏4回の優勝を誇り、野球王国広島の全盛期を築いた、とか親父から聞いた。
だがそれはもう30年以上前の話。
確かとうの昔に引退しているはずだ。
それを今更引っ張り出して監督にするとは…。
はっきり言って野球がどうこうより体のほうが心配だ。

そんなことを思って見ていると監督の後ろからもう1人が出てきて、
「私は横道和美(よこみちかずみ)。横道監督の孫で、ここの英語の先生。監督のかわりにノックとかは川本先生と私がやるわ。女だからって心配しなくても大丈夫よ。これからよろしくね」

真っ先に思ったのはきれいな人だな…ってことだ。
運動していたようで体はすらっと引き締まっているし、顔も美人。
声も透き通っているような感じだ。

「和美は3年前のアテネオリンピックの女子ソフトボール日本代表におったけぇ(いたから)、お前らよりも上手いから大丈夫じゃ。もっとも、肩壊してるからソフトはできんがの」

ああ見えてもなかなかハードな経歴の持ち主だな、と思った。

「さて、それじゃ俺も一応自己紹介しておこう。俺は川本仁(かわもとじん)。お二方と違って特にこれといったこともないが、野球は一応小学校から

ずっとしていた。甲子園は決勝で太田実業に負けて出れなかったが、お前達が俺を連れて行ってくれ。一緒にがんばっていこう」

川本先生が最後に自己紹介をした。

「うむ。それではこれから早速練習に入ろう。わしは鬼監督ではないがそれなりに厳しい練習はするけん、しっかり着いて来いよ」

監督が楽しそうに言う。

全員返事を返し、用具を持ってグランドに向かった。

部室を出るとき古谷が、

「なかなかすごいメンツだな。」

と声をかけてきた。

まったくだ。

こんな学校でいくら歳を取っていたりや肩を壊しているとはいえあんな監督やコーチに指導してもらえるなんてまったく思わなかった。

これならまだ甲子園にいける可能性はある、手の届かないとこにあるわけじゃない、本当にそう思った。

しかし、あの監督がさせた走りこみのゴールは本当に遠かった……

第3話　二ノ宮高校野球部始動！（後書き）

遅くなって申し訳ありません。パソコンがどうも不調でして…。これからも不規則な更新となりそうですがどうぞよろしくお願いします。

あと、広島弁に今回は一応注釈を入れました。自分は広島出身ですのでなんとも思いませんが、他県の方はどうでしょうか？その点なども是非感想と一緒に書いていただけるとありがたいです。皆さんのご指導をお願いします。

第４話　練習初日

「１・２・３、２・２・３、３・２……」

もう１時間はこの掛け声で延々と走っている。
一体今は何周目だろうか。
はじめは揃えていた足もだんだんバラバラになり、今はまったく揃っていない。
表情も余裕があるのは数人であとはもう限界を超えましたって感じだ。
まぁ、運動部にいた奴でも引退してから半年近い。
久しぶりに走るんだからきついのは当たり前だ。

「よし。あと１周したら帰って来んさい。」

ベンチの前を通るとき監督が言った。
やっと終わりだ、とみんなが安堵する様子が見て取れた。
心なしか掛け声も少し大きくなった気がする。
俺も正直言ってうれしい。
どうも同じところをぐるぐる回る走りこみは嫌いだ。
どこか単調な感じで、景色も変わらないから見飽きてしまう。
どうせ走るのなら学校の外に出て道路を走る方がまだ楽しい。

そして１周走り終えてベンチに戻ると監督が俺達は円に座らせて言った。

「お疲れさん。今お前らは大体１０キロちょっと走ったわけだが、それでこんだけくたびれとる
（疲れている）ようじゃまだまだじゃな。これからしばらくの間は

ボールには触らさん。しっかり走りこんで体力つけんと試合は出来ん。今日は小手調べということでここまでとしておく。この後しっかり整理体操やって疲れを明日に残さんようにしておけよ。それじゃあグランドに礼して整理体操に入れ」

ため息が聞こえる。
俺もがっかりだ。
昭和の頃、すごく厳しい野球部では新入部員はなかなかボールに触らせてもらえなかったとどこかで聞いたことがあるが自分がそうなってしまうとは思わなかった。
体力づくりが重要なのは分かっているがやはり面白くない。
やっぱり野球はグランドで思いっ切り打ったり投げたりするものだ。
ただ走るだけなら陸上部と変わらない。

ここでがっかりしていても仕方ない、そう思って整列しにいこうとした時1人の部員が言った。

「監督、そういえばキャプテンは決めないんですか？」

全員が言った奴の方を振り向いた。

「キャプテンを決めないといろいろ面倒だったりすると思うんですけど…」

確かに言われてみればキャプテンを決めていなかった。
キャプテンは重要だからそう簡単に決めるものでもないがとりあえず仮のキャプテンでも決めないと監督達が全員部活に出れない時とかに練習がスムーズに進まないだろう。
しばらく監督はだまっていたが、どうやら俺と同じことを思ったらしく、

「そうじゃの、正式なのはまた今度決めるとしてとりあえず仮のを決めとこう。え～と、それじゃあお前らで後で話し合って決めておけ。キャプテンになった奴は職員室に部室の鍵を返しに行って川本先生に自分がなったと伝えておけ」

と言ってグランドを後にした。
俺達もグランドに礼をし、整理体操をした後部室に戻った。

「キャプテン決める前にまず自己紹介せん？俺まだ名前とか知らんのんじゃけど（知らないのだけど）」

キャプテンを決めるため部室の中で円に座ったとき、俺の隣にいた奴が言った。
みんなそれにうなずき、言いだした奴からということで先ほど発言した奴から始まった。

第４話　練習初日（後書き）

１話あたりの文の量はどのくらいが丁度いいのでしょうか？まだ良く分からないので毎回バラバラです。これから読みやすい量を探していきたいと思います。
あと読んでくださった方々、是非ご意見・ご感想をお願いします！

第5話　メンバー紹介

「それじゃ俺から自己紹介するな。俺は辻敦士（つじあつし）、大竹東中出身で中学の時は陸上部にいた。足には自信があるぜ」

自己紹介が始まった。
今喋った奴は俺のすぐ隣りにいた奴だが、なるほど確かに足は早そうだ。
背はそう高くはないが見た感じかなり足は鍛えられている。

「おい、次はお前だろ？」

辻が俺に言う。

「あぁ、俺は谷川隼人。松川中の出身だ。中学時代も野球部でポジションはピッチャー。よろしくな」

こう俺が言うと正面にいた奴が、

「へぇ～、ピッチャーかぁ。どんな球投げられるん？」

と珍しそうに聞いてきた。

「まぁ、基本はカーブとスライダーだな。フォークとシンカーも一応投げられるけどシンカーは試合じゃ使えない。ほとんど曲がらないからな」

俺がこう返すと、

「すげぇな。今度俺に投げてみてくれよ。あ、俺は村西信也(むらにし しんや)だ。白市中の出身で、中学ん時は卓球部にいたよ」

自己紹介だったということを思い出したらしく付け加えて言った。
こいつはなんとなくサルっぽい。
身長は低いし、なによりすばしっこそうだ。

「えっと、じゃあ今度は俺な。俺は鳥越剛志(とりごえ たけし)、八本松東中学校から来た。中学時代はテニスやってたけど一応小学校の時は野球やってた」

サルの隣りに座ってる奴だ。
どことなく、元日ハム（日本ハムファイターズ）の新庄に似てる気がする。
名前も同じだし。
ただ、性格は彼のようにド派手というわけではなさそうだが。

「古谷拓磨だ。忠海東の出身でポジションはキャッチャーだった。よろしくな」

俺はもう1週間前からこいつとは練習しているからもう知っている。
本当に良いキャッチャーで、もっといい高校に入れば良かったのに…と思った。
そう思って本人に聞いてみたら俺と全く同じで試験に落ち、ここしかなくて仕方なく来たという。
野球で使う頭はあってもそれは勉強では使えないようだ。

「俺は桜井慎吾(さくらい しんご)、武田山中の出身で中学の時は外野やってました。とはいっても大したことないですが…」

体はでかい（軽く１８０はありそう）のだが気は小さいみたいだ。
丁寧な言葉遣いだし、控えめだ。
でも今日の走りこみでほとんど疲れたような様子がないことを見るとなかなかの奴だろう。
少なくともただでかいだけの木偶坊（でくのぼう）ではなさそうだ。

「俺は江口真幸（えぐちまさゆき）。出身は黒瀬川中で、中学の時はサード守ってた。高校でもサードやれるよう頑張るからよろしく」

こいつもでかいがどちらかというと横に大きくなっている。
まぁ、でもそこまで太いわけではなく、標準より少し太いぐらいだし、サードやってたんだから動きはそこまで鈍くないだろう。
ただ今日の走りこみで一番疲れていたのはこいつだ。
少しダイエットが必要だろう。

「俺は小林幸弘（こばやしゆきひろ）。江口と同じで黒瀬川中出身。ただ部活はバスケ部で、野球のルールはあまりよく知らないから少しづつ教えてくれよ」

隣りの江口とは逆で痩せ型の奴だ。
身長もそこまで高くはない。
しかし黒瀬川中のバスケ部はとにかく強いと中学校の時バスケ部の奴から聞いた。
練習もかなり厳しいらしい。
ハードな練習で無駄な肉なんかつけてる暇がなかったんだろう。
それだけ頑張ってきたのに高校で違う部に入るのはもったいないきもするが…。

「俺で最後だな。俺は後藤忠志（ごとうただし）、沼田東中の出身だ。中学のときは柔道やってたぞ」

こいつは確かに野球のユニフォームよりも柔道着の方が似合いそうだ。
井上康生をちっちゃくした感じで結構強そう。
こいつとは取っ組み合いの喧嘩だけはしてはいけないな。

これで自己紹介は終わりだ。
そろそろ本題に入らないといけないと思って、

「さて、これで全員終わったな。キャプテン誰にする？俺的にはキャッチャーやってた古谷がいいと思うけど」

俺はこう提案した。
古谷は中学の時もキャプテンやってたみたいだし、小学校1年からずっと野球をしてきたらしく経験も豊富だ。
それにこいつのポジション、キャッチャーは試合中すべての守備を見ていて、様々な指示をだすポジション。
まさにチームの司令塔だ。
チームをまとめていくのにうってつけだろう。

俺の提案に誰も反対しなかった。
古谷も、もうある程度なると思っていたらしくすんなりと引き受けた。
こうしてとりあえずキャプテンには古谷がなることになった。

第5話　メンバー紹介（後書き）

長ったらしい感じがなきにしもあらず、といった感じになってしまいました。全員する必要はないのではないか、と思いましたが結局入れることにしました。このメンバーと次あたりで出てくるマネージャー数人で1年目は進んでいきます。

第6話　入部試験？

野球部が活動を開始してから1週間が経った。
先週はとにかく走りまくった。
俺は先週1週間だけでこのグランドを何周したのだろうか。
もはや分からないし、思い出したくもない。

さて、今日もまた走ろうかと着替えてグランドに出る。
他の部員達はまだ来てないようだ。
来るまで壁当てでもしてようとグローブとボールをバックから取り出しバックネットに向かってボールを投げた。
ボールはポーンと跳ね返りこちらに戻ってくる。
それを捕っては投げをしばらく繰り返しているうちにベンチの近くにうちの部員のかわりに女子が集まってきているのが目に入った。
何事だろうと投げるのを止め俺はベンチの方を眺めた。
するとその中にうちのクラスの女子が何人かいるのに気がついた。

「これって何かの集まりなん？」
俺はベンチの近くまで行き、女子に聞いてみた。
するとその女子は、
「うん。今日入部試験があるんよ」
と答えた。
入部試験？と俺が問い返すと今度は隣にいた子が、
「そう。何か今回野球部のマネージャーになりたいって子が多かっ

たらしくて、監督がテストをして3人だけ選ぶんだって」

野球名門校で選手として入部する奴を入部試験でふるいにかけるのなら聞いたことがあるが、マネージャーの入部試験するなんて聞いたことがない。
まあ確かにあんまりたくさんいても邪魔だが、別に試験なんて大げさのものしなくてもいいのにと思いつつ、その子には試験頑張れよと声をかけてベンチを離れた。

しばらくすると男子達は全員集まりいつものようにアップを始めた。
俺は走りながらそれとなくベンチの方を見ると、監督が出てきてなにやら話している。
何をさせるんだろうと考えていると横にいた鳥越が、

「あれ何やってんだ？」

と聞いてきた。

「あぁ、うちのマネージャーになりたいって奴らだ。あまりに数が多いから入部試験やるんだってさ」

と答えてやった。
すると鳥越は

「へぇ～。マネージャーになりたいって人そんなにいるんだ。ってかさ、別に全員してやれば良くない？俺からすればいっぱいいたほうが華があっていいんだけどな」

と少し残念そうに言う。

まぁ、分からんでもないがそれで部活がグダグダになっても困る。
第一うちの学校はただでさえ女子が多いのに、その上部活でまでたくさんの女子と顔をつきあわせるようになると正直言って疲れるし。

アップを済ませてベンチに戻ると監督は俺らに、

「よし。アップは終わったようじゃな。お前達はいつものように走りこみじゃ。走り終わったら１０分休憩して筋トレをするようにな」

といつもどうりのメニューを告げる。
今日も走りこみと筋トレで終わりか。
おそらくほぼ全員がこんなふうに退屈に思っただろう。
しかししばらくの辛抱だと俺達は走り始めた。

俺は走りながらベンチのほうを見てみた。
どうやら試験が始まったようだ。
なにやら全員がベンチなどに腰掛一生懸命手を動かしている。

「何やっとんかね？」

村西が後ろから声をかけてきた。

「さあな。何か細々（こまごま）したことやってるみたいだけどさ」

と返した。

「なんか裁縫道具みたいなもんが見えるぞ」

後藤が言う。

「裁縫道具？雑巾でも縫ってんのよ」
と小林。
すると桜井が控えめな声で
「ボール縫ってんじゃないですかね？ベンチの近くに古いボールが入ったケースがありましたし…」
と言った。
この桜井の発言で全員があぁ、なるほどなと納得した。
古くなった硬球は縫い目が切れてしまう。
切れたままでは使えないし、かといって捨てるわけにもいかない。
そこでマネージャーとかがそのボールを縫うのだ。
そういえば古いボールが大量に入った箱が部室にあったな。
「ご苦労なことだな。俺ああいう細かいのとか絶対無理だし」
辻が言う。
まぁ確かにこいつは無理そうな感じだ。
結構派手好きのようだし。

女子達は結局俺達が筋トレを終わるまで縫い続けていた。
終わったあとの女子たちの顔を見ると疲れきった顔をしている。
ほんとよくこんなもんずっとやったなと感心した。
そして晴れて入部試験に合格した3人が発表されたのは次の日のことだった。

第6話　入部試験？（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしています！どんなことでも構いません！

第7話　入部試験の真相

マネージャー入部試験の翌日の放課後、合格したマネージャーが部活に出てきた。
俺が着替えを終わらせてグランドに出ると3人はすでに来ていて、ベンチに座っていた。

「マネージャーに決まった人？」

俺は3人に声をかけた。
そうしたら一番近くに座っていたのが、

「あ、はい。水島由紀です。よろしくお願いします」

と言った。
しかし今更説明される必要も無かった。

「お前は知ってるよ。クラスで席が近くだろうが」

と言うと、

「あっ、なんだ谷川君か。違う人に見えた」

と先ほどとは態度がさっと変わった。

「ったく。でそっちのお二人は？」

俺は残りの2人に自己紹介を促した。

「宮原絵里です。これからよろしくお願いします」

おとなしそうな人だ。
きれいでスタイルも見た感じよさそう。
多分この人はもてるタイプだ。

「小松沙織です。よろしくお願いします」

なんかもっとおとなしそうな人だ。
顔はかわいいと思うけど緊張してるのかすごいこわばってる。
あんまりマネージャーに向きそうなタイプとも思えないが…。
まあでもやることはしっかりやってくれそうではあるな。

そんなことを思いつつ2人にこれからよろしく、と言っておく。
そして俺は昨日のことを思い出し3人に聞いてみる。

「そういや入部試験って何やってたんだ？」

すると水島が、

「昨日のあれ？あれはずっとボール縫ってただけよ。1人15個で、どれだけ時間内で丁寧に縫えるかって」

と、ため息交じりに言う。
俺はやっぱりそうだったんだと思った。

「15個も縫わされてたのか。ってか昨日20人くらいいたよな？
ということは軽く300個みんなで縫ったってことか」

俺がそう言うと水島が

「そういうことになるよね。なんで新しく出来たうちの学校の野球部にあんなに古いボールがたくさんあるんかね？」

と聞いてくる。

俺はふと初めて部室に入った時のことを思い出した。

そういえばあの時古いボールが大量に入った箱がいくつかあったのを見た気がする。

ここで俺はあの監督が入部試験なんてものをした理由が分かった。

あのじいさんは入部試験なんて言いながらただ古いボールの補修をさせただけなのだ。

おそらく縫ったボールなんていちいち見ていない。

マネージャーの人選もそんなに深く考えてはいないだろう。

まったく、詐欺師みたいなじいさんだ。

「あのボールは多分どっかの高校のお古だよ。あの監督は昔は超有名だった人だからいろんな高校に顔もきくだろうし」

俺がそういうと水島は少し驚いたようで、

「へぇ～、そうなんだ。ただのどこにでもいるおじいちゃんかと思った」

と言った。

まぁ確かに高校野球が好きな奴じゃないとただのじいさんにしか見えないだろうな。

あの人が活躍してたのは相当前の話だし。

そんな話をしていると少しずつ部員がグランドに出て来始めた。

そろそろ始まるかな、と思ってグランドに行こうとすると、

「谷川君、うちら今日何しとけばいいんかね？」

と水島が聞いてくる。

「さぁ、ベンチにでも座っとけばいいんじゃない？どうせ今日も走るだけだし。多分しばらくこんな感じが続くからマネージャーは退屈だと思うよ」

と言ってグランドに出た。

案の定今日も走るだけだった。

女子達が一生懸命に縫ったボールが使われ始めたのはこれからさらに2週間も後のことだった。

第7話　入部試験の真相（後書き）

更新が遅くなってすいません。次の更新も今週から来週にかけて期末テストがあるのでおそらく相当遅くなると思います。テスト勉強なんてどうせほとんどしませんが、宿題が悲惨なくらい多いのでそっちをまずは頑張ります。ご迷惑をおかけしますがこれからもよろしくお願いします。

第8話　ボールだ！

「お前ら今までよく頑張ったな。明日からボールを使った練習に入るとそうだ。これでようやく野球部らしくなるな」

川本先生が俺達にこう告げたときにはもう4月は過ぎ去り、5月に入っていた。
入部してから約1ヶ月、ようやくボールに触れることができる。
俺は正直ほっとした。
あの監督なら1年生の間はボールに触らせずひたすら体力づくり！とか言いそうで少し心配していたのだ。
しかし、創部1年目で上級生がいないからしっかり実戦に出して経験を積ますということなのだろう。

翌日、俺達はボールを見て歓声をあげた。
部員の半分は硬式ボールを見るのが初めてだ。
手にとってみたり地面に落としてみたりしている。
俺は一応春休みの頃から硬球で軽く練習していたから大体感じは分かっていた。

「これすっげぇ硬いな」

鳥越がボールを握りながら言う。

「そりゃ一応『硬式』ボールだからな。軟式テニスのボールとは訳が違うだろ。もっとも、硬式テニスボールと比べても断然硬いけどな」

と言うのは江口だ。
そうそう、そういえばこいつこの頃だいぶスリムになってきた気がする。
実際この1ヶ月で5キロ以上体重が落ちたらしい。
まぁ、あれだけ走らされれば誰だって痩せる。
俺も2キロ減った。

しばらくボールをつついていると横道先生（女の方）が現れた。
ジャージ姿で木製バットを肩に担いでの登場だ。
そんなに背が大きいわけでもないが何か大きな威圧感を感じる。
バットを持っているからだけではなく、やはりオリンピックに出るような人は普通の人とは違うオーラを持っているのかもしれない。

「みんな来てるわね？これから1週間はとりあえずボールに慣れるためにキャッチボールを中心に軽いノックやトスバッティングをやるからね。ただし、ランニングは継続よ。10キロから8キロに減るけどね」

10キロから8キロって大して変わらないし。
というかせっかくまともな練習が出来ると思ったのにまだ走らないといけないとは……。
まぁでもボールを使わしてくれるだけましか。
そう諦めて練習に入った。
俺は古谷とキャッチボールをすることにした。
これからバッテリーを組んでいくのだから当然だ。
そしていざキャッチボールを始めようとしたら一人途方に暮れている奴がいた。

「ちょっと待ってくれ。俺一人ぼっちなんだけど」

と村西が言う。
そういえばうちは9人だから2人ずつだと1人余ってしまうんだった。

「隣りの辻君と後藤君のところに入って3人でしてくれる？あたしがやってあげれたらいんだけどダメなのよね」

と横道先生が言う。
先生は肩壊してしまってたんだったな。

こうしてキャッチボールを始めたのだがまともにやれているのは俺達と桜井・鳥越のペアのみ。
江口・小林のペアは江口はまだ大丈夫だが小林が大丈夫じゃない。
後ろにボールが転がっていくのはほぼ毎回で、投げ方もおぼつかない。
しかも顔面に一発喰らってしばらくダウンしていた。
江口も若干暴投が多い。

辻・村西・後藤のペアは悲惨だ。
ボールがまっすぐ相手に届いたためしがない。
毎回ボールがそこら中に転がっていく。
投げ方・捕り方ともにまるでなってない。
実戦経験とかそんな問題ではなく、基礎がなってないのだ。
まぁ、3人とも野球未経験者だし後藤に至っては草野球の経験すらないのだから仕方ないが。

こんなんでこれから先大丈夫なのか……？

いや、ダメかも。

第8話　ボールだ！（後書き）

お久しぶりです。やっとテスト終わりました。これからは更新のスピードを上げていこうと思います。頑張っていくのでよろしくお願いします！

第9話　練習試合？

ボールを使った練習を始めてから2週間が経った。

練習はだんだんと本格的なものとなっていっている。

ノックもはじめは本当に軽くするだけだったのが今では各自が自分の希望の守備位置について受けているし、打撃練習もトスバッティングだけでなく俺が軽く投げた球を打つようになっていた。

俺と古谷もブルペンでの投げ込みを許可されている。

毎日大体１００球を目安に投げており、変化球も交えた投げ込みだ。

このところはフォークを中心に練習している。

もともとキャッチャーだったという監督の指導も受け、この１週間でかなり落ちるようになった。

自分の成長がこんな感じではっきりと分かってくると毎日の練習がすごく楽しい。

やはり野球部の練習とはこうでなくちゃ、と思った。

しかし、チームの状況はさほど変わらない。

「おい！まだ腰が高いぞ、そんなんでボールが捕れるか。しっかり腰を落とせ！」

「どこ向いて投げとるか！相手の胸に向かって投げろと言っただろう」

「おいファースト！体で止めろ、体で。お前が捕らんとアウトにならんだろうが」

グランドに川本先生の怒声が響く。
ほとんど鳴り止むことはない。
ずっとこんな調子なのでこのごろ喉がかれてきてるようだ。

監督は様子をずっとベンチから眺めている。
ただボーっと見てるだけのように見えるが、練習が終わったあとにその日の練習で気になったことを一人一人に伝える。
その指摘も的確だ。
初心者にはあまり細かいことは言わず基礎的なことを、経験者には細かいとこをというように個人のレベルに合わせて注意をする。
俺もまだまだ直していかないといけないとこが多いと改めて感じさせられた。

今日も練習が終わると俺達は監督の周りに集まり注意を聞く。

「後藤は捕り方はだいぶ良くなってきたようじゃな。しかし、投げ方がまだ前に言ったことが出来ておらんのぉ。体を突っ込みすぎとるんじゃ。じゃけぇコントロールが……」

全員がしっかり指示を聞く。
みんな上手くはないがまじめなのがいいところだ。
これからしっかり時間をかけていけばきっと上手くなっていくだろう。

「毎日言っとるがしっかりその日注意されたとこを頭に叩き込んでおくようにな。よし、それじゃ解散にしようかの」

いつものように監督に礼をして、グランド整備に向かおうとした。
しかし、監督が俺達を呼び止めた。

「あぁ、忘れとったわい。来週の土曜日に西賀茂高校と練習試合をするけんの。しっかり練習しとくようにな」

は？

全員が唖然とした。

練習試合！？

第9話　練習試合？（後書き）

ご意見・ご感想をお待ちしています！どんな些細なことでも構いません！

第１０話　特訓

「セカンド！飛び跳ねすぎだ、お前はサルか」

「ライト！セカンドが逸らしたらそれをお前が捕らんといけんだろ。お前の後ろにもう守備はおらんぞ！」

「ファースト！頼むからボールを後ろに逸らすのだけはやめてくれ」

グランドに怒声が響く。

とは言ってもそれは川本先生のものではない。

時間帯も今は朝の７時４０…

ビュン！

ボールが俺の真横を通り過ぎた。

「ピッチャー！ぼさっとするな！」

古谷が怒鳴る。

「次、サード！」

そう言った瞬間にはもうボールはサードへ飛んでいっていた。

江口が横っ飛びでボールに喰らいつく。

しかしボールはグラブの横をさっと通り抜けていった。

「おしい！もう少し反応を早く！」

そしてショート、セカンドと続けていく。
練習試合まであと2日、とりあえず形だけでも試合らしくなるようにしようということで毎朝こうして朝練をしている。
7時２０分ぐらいから始めて８時３０分の朝のＳＨＲ［ショートホームルーム］が始まるギリギリまでこうしてノックを受け続ける。
これが結構しんどい。
川本先生のノックと古谷のノックどっちが辛いかって言われたら古谷のの方がキツいとみんな言うだろう。
俺はピッチャーだから他の守備位置と比べると走ることが少ない分楽だが、他の守備、特に外野はもう走りっぱなしだ。
朝練を終えて教室までダッシュで駆け上がるとそこで大体力尽きる。
授業中は基本的に睡眠時間。
国語だろうと英語だろうとそんなことは関係ない。
ただ唯一の例外は桜井で、あいつは授業をきちんと受けていて寝ることは全くないらしい。
この話を聞いたとき本当に真面目な奴だなと少し尊敬した。
俺には天地がひっくり返っても無理な話だ。

「よし、ここまで。時間がないから急いで上がれよ。遅刻しても知らんからな」

８時２５分、ようやく古谷がノックをやめる。
しかし、全員が「ここまで」と言われた瞬間には全力で部室に向かっていた。
俺は古谷と一緒に部室に向かう。

「なんとか試合の形くらいは出来そうになってきたな」

俺は古谷からバットを受け取りながら言った。

「あぁ。なんとかなりそうだ。ただ試合が初めての奴が半分だからな。当日緊張で固まらなければいいが…」

古谷が難しい顔をして言った。

「そうだな。そこが俺も心配だ」

俺も同感だ。

試合に慣れてる俺や古谷なんかは別に緊張なんてそんなにしないが大抵初めての奴は多分ガチガチに緊張するだろう。

さすがに俺も初めて先発したときは完璧に緊張してて、ボークまでしてしまった記憶がある。

「ところでさ、お前はどうする？普通にきっちり抑えるつもりでいくか、守備練習ということで適度に打たれるか、どっちがいい？」

この古谷の問いに俺は少し考えたが、

「きっちり抑えるつもりでいこう。第一そのつもりでいってもめった打ちにあうかもしれんし」

と、本気でいくことにした。

俺は今まで軟式で投げてきたわけで、硬球で試合をしたことはない。

自分がどれくらい通用するか確かめてみたいし、やはりどうせ試合をするなら勝ちたい。

「分かった。まぁでも一応打たせて捕る方針でいくからな」

古谷が言う。
俺は別に異論はない。
ただ、本気でやって俺はどれくらい抑えられるのか。
チームのエラーがどれくらいで済み、何点で抑えられるのか。
そしてうちのチームは何点とれるのか。
これらは全く分からない。
こうして不安と期待の入り混じる気持ちで俺は練習試合当日を迎えることになった。

第１１話　洗礼

練習試合当日、空はきれいに澄みわたり絶好の野球日和になった。
俺が学校に着いたときにはもう全員が集まっていて、それぞれがアップを始めていた。
俺も急いでユニフォームに着替えた。
このユニフォームは当たり前だが初めて着る。
上下ともに灰色で、胸のところに「二ノ宮」と漢字で書かれた結構シンプルなものだ。
帽子は黒地に銀糸で二ノ宮の「N」が刺繍されてある。
ちなみにこれらのデザインはみな監督が決めたものらしい。

着替え終えてグランドに出て時計を見ると8時３０分過ぎを指していた。
試合開始は１０時丁度、昨日グランドの整備もやっておいたからまだまだ時間には余裕がある。
俺は軽くキャッチボールでもしようと思って、近くにいた村西に声をかけた。
村西も丁度しようと思ったとこだったらしくボールとグローブをベンチまで取りに行って早速始めた。

「お前確か試合は始めてだったよな。緊張してるか？」

俺はボールを投げながら聞いた。

「う～ん、そこそこ。まぁ俺は結構能天気だから」

村西も投げ返しながら言った。

確かにこいつはそんなに緊張で固まるようなタイプじゃなさそうではある。
しかし、表情はいつもと違う。
いつもこいつはヘラヘラしてる感じなのに今日は表情が固い。
冗談も言わない。
やっぱり緊張しているみたいだ。

「まぁ気楽にいこうぜ。ただの練習試合だし、初めてなんだから勝ち負けなんか関係ねぇよ。草野球と思えばいいさ」

軽く緊張をほぐそうと思って言ったが、あまり効果はなさそうだ。
村西はあぁ、そうだなと言ったが表情は相変わらず。
まぁこれから慣れていくしかないだろう。

しばらくしていると監督がグランドに現れた。

「気をつけ、礼！」

「おはようございます！」

古谷の号令で全員が手を止めて挨拶をする。
監督は帽子を取って軽くうなずき、それからこっちへ集まれと合図をした。

「今日はいよいよ練習試合じゃ。初めての奴も多いけぇ緊張していると思うが、今日は試合を楽しんで来い。エラーは仕方ない、まだまだ練習不足じゃけんの。これからだんだん試合になれていけばええけぇ、今日は思いっ切りやることじゃ。ええか？」

「はい！」
監督の言葉に全員が力強く返事をする。
俺もやる気が出てきた。
「よし、じゃアップにかかれ」

しばらくアップをしていると9時過ぎに相手のチームが到着した。
西賀茂高校、もともとそんなに強いほうではないがそれでも時々夏の県予選でベスト8ぐらいまでは進んでいる高校だ。
そんなに強豪というほどではないが、この忙しい時期によく来てくれたなと思った。
この時期は夏の甲子園の予選に向け毎週のように練習試合をしている。
そんなときに俺らみたいな格下の学校にわざわざ来てくれているのだ。
本来なら俺達が向こうに頼んでいるわけだし向こうの学校に行ってさせてもらうのが普通だが、うちの監督が向こうの監督に練習試合を頼んだところ向こうからこっちへ来ると言ってきたらしい。
監督の名がものを言った、というところか。

そして向こうのアップも終わった10時、ホームベースに両チームが整列した。
相手は1年2年といった2軍を出してくるだろうと思ったが意外にも3年ばかりの1軍がでてきた。
「これから西加茂高校対二ノ宮高校の練習試合を始めます。礼」

「お願いします！！」

主審の号令で試合は始まった。
ホームである俺達は当然後攻。
しかし、審判は普通はこちらが出さないといけないが人数がギリギリであるため向こうにお願いした。

俺はマウンドで3球ほど投球練習をする。
3球ともストレート。
朝来てからブルペンで古谷と２０球ほど投球練習をしたが、今日はわりと調子がいい。
なんだかバッチリ抑えられそうな気がした。

「プレイ！」

球審がコールする。
俺は振りかぶり、第1球を投げた。

キーン！

鋭い打球がサードの横を抜けていく。
初球の甘く入ったストレートをきれいに打たれた。
バッチリ抑えられそう、言ったそばからこれだ。
俺はため息をついた。

無死（ノーアウト）一塁、相手は走ってくるだろうとおもったら案の定初球から盗塁をかけてきた。
古谷は当然読んでいて、外にストレートをはずさせて2塁へ投げる。
ボール自体のタイミングは完璧だったが、ショートの小林がボールを落としてしまった。

「ごめん、谷川」

小林が申し訳なさそうに言う。

「気にすんな。切り替えていこうぜ」

俺は少しもったいないなと思ったが当然起こることなので仕方ない。
第一ランナーを出したのは自分なのだ。
俺も気持ちを切り替えようと思い、深呼吸をしてバッターに向き直る。

2球目はボール。
これは少し内角によりすぎた。

そして3球目を投げる。
バッターは投げた瞬間バットを構えてバントをした。

コン。

ボールはファーストのライン沿いを転がった。
上手い。
相手のことながらそう思った。
これは古谷がさばいてアウト。
二塁ランナーは進塁し、一死(ワンアウト)三塁。

次の3番バッターは抑えた。
2球目のスライダーを叩いて平凡なセカンドゴロ。
ランナーはそのままで二死(ツーアウト)三塁。

そして４番を迎えた。
ただ思っていたより小さいバッターだった。
背も低いし、体格もそこまで大きくない。
そう思って油断したのが災いのもとだった。

キーン！

グランドに再び快音が響いた。
１番バッターのときと同じく、初球だった。
内角低めに投げたスライダーは古谷の構えたグローブには収まらず
レフトの向こうの雑木林に消えていった。

２ランホームラン。
俺は悠々と塁をまわるバッターを呆然と見ていた。
そして、これが高校野球だ、そう思った。

第１１話　洗礼（後書き）

野球をあまり知らない人だと描写が下手なんでわかりづらいかもしれないです。ここが分かりにくいとかあったら是非ご指摘ください。出来る限り努力していきます。

第１２話　１点

「よぉがんばった。じゃがの、あそこでエラーを続けちゃいかんかった。チームの雰囲気が悪くなった時こそ、もっとがんばらにゃいけんと自分を奮い立たさんとの。ピッチャーはもっと辛いんじゃけん」

ベンチに引き揚げてきた俺達を集めて監督は言った。
１回の表をまとめると、結局あの後ショート・セカンド・ファーストのエラー３つとヒット１本でさらに３点を入れられて点差はいきなり５点になっていた。

「よし、１点ずつ取り返していくぞ！」

「おぉ！！」

円陣を組み、古谷の掛け声で全員が気合を入れなおす。

しかし、１回の表は３者凡退で終わった。
１番辻は空振りの三振。
２番村西はぼてぼてのファーストゴロ。
３番の俺も高々と打ち上げレフトフライ。
あまりにも呆気なかったので再び雰囲気が悪くなる。

その後２回、３回、４回と続けてランナーを得点圏に背負う苦しい展開となったがそのたびに古谷の一喝で全員に気合が入りなんとか乗り切った。

そして４回表、

「よし、この回はまた1番からの攻撃だ。もう全員1順したし、少しは試合の雰囲気が分かったよな。1点ずつ取り返してまずは追いつこうぜ」

守備から引き揚げてきた俺達に古谷が言った。
これにまずは1番辻が応えた。
ひたすらファールで粘り、フォアボールで出塁した。
おそらく、本人は意識して粘ったわけではなくただ打ち損ねてファールを打ち続けただけだが、とにかく俺達のチームの初めてのランナーがでた。
そしてこれに続いて欲しい2番村西だが、これはあえなく三振。
本来ここはランナーを送る場面だが初心者の村西にやらすのは無理だ。
第一この場面でバントをするべきということもまだ頭に浮かんでこないだろうし。

そういえば今気づいたのだが今回、この1・2番に初心者の2人が並んでいる。
これはおそらくこれからに向けてのものだ。
俺は辻も村西もこの打順に向いていると思う。
もちろん今のままだと使い物にならないが、2人ともいいものを持っている。
辻は50メートル6秒1の超俊足、村西も足は速いしなにより器用だ。
これから上達していけばきっといい1番2番になる。
監督はそれを見越して2人をこの打順に据えたのだろう。

さて、試合に戻ろう。
次は俺の打順だ。

俺は軽く頭を下げてバッターボックスに入る。
サインの確認のため監督を見たが、監督は座ったままこっちを見るだけだった。
あぁ、そういえば今日はノーサインだ。
朝監督が今日は自由にやれとサインを出さないと言っていたのを忘れていた。
俺も緊張してたのかな、そんなことを思いながらバットを構える。

１球目、ストライク。
高いな、と思って見逃したらギリギリで入ったらしい。
目を切るのが早い、しっかり集中しないと、と思いピッチャーの動きを一つも見逃さないようにそれだけを見る。

２球目、ボール。
はっきりとしたボール球だった。

３球目、よし、これだと思って思い切り振ったがボールはするりとバットの下を通り抜けた。
チェンジアップだ。
俺はストレートだと思って振ったのだが、変化していると気付いたのは振り始めた後で、もう遅かった。
やはりまだボールを最後まで見切れていない。
これでは打てないなと思いここは次の古谷につなぐことにした。

４球目、相手が投げた後バットをさっと前に構えてバントをした。

コン。

ボールはファーストラインに沿って転がっていく。
１回に相手にやられたことをそのままやってみたら自分でもびっく

りするぐらい上手く出来た。
俺もセーフか、と思ったがさすがにそこまで甘くはなくきっちりアウトを捕られた。
しかしこれでランナーが得点圏まで進んだ。
ベンチに戻る前に頼んだぞ、と古谷に目で合図をする。
古谷も頷いた。
ここまで押されっぱなしで、しゅんとなってしまっているが1点取れれば少しはチームの雰囲気が良くなる。
それで勝てるかどうかは別として、少なくとも少しは試合は楽しくなるはずだ。
今回はそれでいい。
そう、この試合は勝つことより楽しむことが目標なんだから。

古谷がバッターボックスに立った。
ゆっくりとバットを構える。
まさに俺達のチームの柱といった感じですごく堂々とした構えだ。

ピッチャーが振りかぶる。
そして振り下ろした右腕からボールが離れまっすぐとキャッチャーのミットを目指す。
しかしそのボールは古谷の振ったバットに捕らえられて弾き返された。

グランドに快音が響いた。

第13話　楽しかったか？

打球はショートの頭の上を越え、左中間を破った。

「よっしゃぁ！！」

ベンチにいた俺達はボールがショートを飛び越えた時点で叫んでいた。

監督もベンチから立ち上がってボールの行方を見る。

ボールは相手チームのセンターとレフトが懸命に追っていたが、外野の後ろに並べた移動式のネットのところまで転がっていった。

もともと俊足の辻は普通のヒットでもホームに帰ってこれるかもしれないぐらいの奴なので楽々ホームイン。

一方古谷も懸命に走る。

別に俊足というほどでもないがベースの走り方が上手い。

走塁は単に足の速さだけでは決まらない。

ちゃんとした走り方をしないとどんなに足の速い奴でも普通の奴と同じぐらいでしか走れないのだ。

古谷がセカンドベースを回ったとき、外野ではセンターがようやくボールに追いつき中継に入ったショートへボールを投げる。

古谷は全力疾走のままサードベースを蹴り、ホームへ突っ込む。

相手のショートもさらに中継に入っていたピッチャーを飛ばして一気にバックホーム。

ボールと古谷はほぼ同時にホームへ飛び込んだ。

判定は……、

「セーフ！」

主審のコールが響く。

「やった！」

再びベンチが沸く。
ホームに滑り込んだ古谷も立ち上がりガッツポーズ。
そして帰ってきた古谷とハイタッチを交わす。

「ナイスラン、古谷」

俺がそういうと、

「これでみんな少しは試合が面白いと思えるだろう」

と言った。
俺と同じことを思っていたようだ。

「あぁ。それにしても綺麗に打ち返したな。相手のピッチャー唖然としてたぞ。まぁ、俺もホームラン打たれたときはああだったんだろうけどな」

そういうと今日は調子がいいみたいだ、と言ってベンチの中へ入った。

これでうちのチームも一矢報いることが出来た。
初試合で三年生を相手にこれだけ戦えれば十分だろう。
あとは俺がこれ以上失点しないだけ、と思ったがこれだけでは終わらなかった。

古谷に完璧に打たれて若干動揺したのか相手の投手は続く5番江口にデッドボールを出した。
これで二死一塁となる。
そしてバッターは6番の桜井。
ここで誰もが予想しなかったことが起きた。
ツースリーと追い込まれて粘った7球目だった。
外角高めにきた球を思い切り打ち返した。
グランドに再び快音が響きボールはぐんぐん飛んでいく。
そして、レフトの頭を越え、そしてレフトのネットも越えて初回に打たれたホームランと同じように雑木林の中に消えた。

ベンチは呆然とその様子を見ていた。
そしてボールが見えなくなると全員が隣りと顔を見合わせ、一瞬の間があった後、大騒ぎになった。
このまさかのツーランホームランでこれまたまさかの1点差。
本当に誰も予想しなかった展開だ。

ところでこのホームランを一番驚いていたのは打った当人である桜井。
打った後しばらくホームに突っ立ったままでボールが見えなくなってしばらくしてから主審に促されて塁を回りだした。
さらにファーストベースを踏み忘れそうになり、そのときファーストコーチャーズボックスに立っていた辻が慌てて桜井を呼び戻す場面もあった。
なんとか1周して戻ってくると俺達が寄ってたかって桜井を叩く。
あ、もちろん別にいじめてるわけではない。
野球ではよくあることだ。

しかし、反撃もここで打ち止め。
その後試合が終わるまで俺達のチームがランナーを出すことはなか

った。

「5対4、よって西賀茂高校の勝ちです。全員礼！」

「ありがとうございました！」

こうして俺達の初試合は敗北に終わったが案外自分たちのチームは強かった、というのが第一の感想だ。
結局エラーも初回の3つのみだし（まぁ本来ゼロじゃないといけないんだけどな）、スコアも5対4と接戦だったし。
実際初回エラーがなければ勝っていたことになる。
これはひょっとすると2年後には甲子園だって夢じゃないかもしれない。

「どうじゃ、試合は楽しかったか？」

試合後、俺達を集めて監督が言った。
全員がうなずいた。
しかし、うなずいたわりには全員あまりうれしそうではない。
特に一番満足してそうな初試合組が不満そうだった。

「何じゃ、不満そうじゃの村西。どうしたんじゃ？」

と聞くと村西は、

「自分がエラーしてなければ試合に勝っていたはずです。せっかく古谷や桜井が点を取ってくれたのに結局自分が足を引っ張ってしまったんです。そこが一番悔しいです」

と言う。
すると他の数人もうなずいた。
「なるほどの。お前らは思ったより骨のある奴らじゃのぉ。これで満足しとったら甲子園はおろか公式戦で1回も勝てんじゃろう。じゃがお前らは満足せんかった。要するにお前らはみんな負けず嫌いのようじゃ。負けず嫌いじゃないと上手くはなれんからのぉ。惜しかった、でも頑張ったからいっか、なんて思っとるようじゃいつまでも惜しかった、で終わってしまう。なぁお前ら、勝ちたいか？勝ちたかったらとにかく努力することじゃ。誰よりも多くするんじゃ。人が自分の2倍すれば自分はそいつの2倍やれ。また向こうが自分の2倍したらさらに2倍するんじゃ。努力はお前を絶対に裏切らない。この後は自主練とする。何時までやってもいい。自主練では自分自身とも勝負じゃ。自分にも負けるな。それじゃあ解散」

村西や監督の言葉を聞いて俺は自分自身を恥じた。
初試合のあいつらですら不満に思った試合を俺は十分だと思った。
それにもともと今回一番反省点が多いはずなのは俺だ。
ほとんど毎回のようにランナーを出し、ホームランも浴びた。
その俺が満足している。
一体どういうことだ？
俺は自分自身に腹が立った。

俺はそのあと２００球投げ込み、２０キロ走りこんでさらに2時間筋トレをして帰った。
他の奴も昼飯を食った2，３０分以外はずっと練習していた。

この練習試合をきっかけに全員練習を本当に一生懸命にするようになった。
あの監督はこれを狙っていたのかもしれない。

全員が一日一日上手くなっていくのが分かる。
日進月歩とはまさにこのことだ。
そして月日は足早に流れていき、いつの間にか梅雨も通り過ぎて暑い夏を迎えた。

第１３話　楽しかったか？（後書き）

感想お待ちしています！どんな些細なことでも構いません！！

第１４話　恋の予感？

「おい、聞いたか谷川！俺達の１回戦の相手は八本松工業だってさ！」

初夏の少し蒸し暑い昼下がり、教室で弁当を食べていたら隣のクラスの村西が突然入ってきて俺に向かって叫んだ。
こんな教室で大々的に宣伝することもなかろうに…。

「八工？あそこ今年シードじゃないのか。ついてないな」

俺は弁当の玉子焼きを食べながら答える。

「なぁ、八本松って強いん？」

村西が俺の弁当のウインナーをつまんで言う。

「俺の弁当を普通に食ってんじゃねぇよ。八工は甲子園３度の出場経験がある。ここ最近はベスト８ぐらいでとまることが多いけど俺らに比べたら雲の上ぐらいにいる高校だ。おい、唐揚げは取るな。取ったらバッティングの時お前にはデッドボールを受ける練習させるぞ」

村西はそういうとつまんだ唐揚げを素直に戻した。

「へぇ～。でもさ、頑張れば勝てんこともないよな」

能天気に村西が言う。

「まぁな。１０００回やれば1回くらいは勝てるさ。要はその1回に運良くあたればいいんだ」

と言っとく。

１０００回じゃ足りないかもしれないが。

「だよな。じゃあ練習頑張ろうぜ」

そう言って帰り際にウインナーをもう1本つまんで帰った。

その後しばらくクラスの奴らと喋りながら飯を食ったが、村西が大きな声で言ったせいでいろんな奴に同じ説明を何度もする羽目になった。

食べ終わった後、弁当をバックに入れようと席を立ったとき、他のクラスで弁当を食っていたらしい水島が帰ってきて、

「谷川君！1回戦の相手が決まったって。八本松なんとかって言ってた！」

と村西同様教室に響く大きな声で言う。

「あぁ。もう聞いた。八本松工業だろ？」

俺がそういうと、

「なんだ。知ってたんだ。で、その高校強いん？」

と、もう何度聞いたか分からないことを言う。

「あぁ。すっごく」

もういちいち丁寧に答える気にもならない。
「えぇ～。うちのチーム勝てるかね？」
こいつもまぁ能天気なことだ。
「あぁ。余裕さ」
と言ってみると、
「ほんまに！？うちんとこそんなに強いん？」
と驚いたように言う。
やれやれ、無知はこわいな。
「冗談だよ。そう簡単に勝てるもんか」
俺は空になったペットボトルをバックに投げる。
しかしペットボトルはバックに入らず乾いた音を立てて床を転がる。
「下手くそ。ピッチャーの谷川君がこんなんだからダメなんかもね」
水島が肩を落として言う。
「ほっとけ！」
俺はペットボトルを拾ってバックに入れた。

その日の練習が終わったあと、監督から正式？に1回戦の相手が発表された。

「練習お疲れさん。で、みんな聞いたと思うが広島県予選大会の組み合わせが決まった。我が校の初戦の相手は八本松工業じゃ。相手としては申し分ない、というよりおつりがえっともなぁ（とにかくたくさん）くる相手じゃが、そんなことを気にするのは監督であるわしだけでえぇ。お前らはそんなことを気にせんで、思いっきり戦えばえぇ。分かったの？」

監督は俺達一人一人を見渡しながら言った。
この監督がこういうと本当に勝てそうな気がしてくるのだから不思議だ。

「はい！」

俺達はよどみなく返事をする。
全員が監督を信頼している証だ。
この監督はただ厳しい練習を課すだけの監督ではない。
効率よく、一人一人にあわせて指導する横道監督はまさしく名将というのにふさわしい。
その指導のよさは記録が照明している。

その帰り、俺はいつものように古谷達と駅へ歩いていたが、途中で今日部室のカギ当番だったことを思い出し全力疾走で部室に戻った。
すると、まだ誰かが部室にいた。
また辻が誰かがモタモタしてんのかと思ったらそうではなかった。

「何やってんだ？下校時間過ぎたぞ？」

そこにいたのはマネージャーの小松だった。
ボールケースからボールを取り出して袋に入れている。
「縫い目の切れたボールを持って帰って縫ってこようと思って……」
小さな声でそう言う。
なにか悪いことをしました、という顔をしている。
「ボールを？そういえばこのボロ、せっかくこないだ縫ってもらったのにもう切れ始めてるよな」
こないだ、というのは例のマネージャー達の入部試験のことだ。
ハードな練習続きでこのボール達も毎日毎日打たれ地面に叩きつけられえらい目に遭っている。
「…うん。みんな頑張ってるから少しでも何か手伝いたいたくて…」
小松が言う。
ものすごくけな気な娘だな…。
俺はしばらくぼんやりと小松の顔を見つめてしまった。
我に返ると小松が不思議そうな顔でこっちを見返している。
俺はあわてて顔をそらして、
「じゃあ俺も手伝うよ。ボールの縫い目を切ってるのは俺達だし」
そう言って１０分ほどボールの選別を手伝った。
ボールは案外多く３０球ほど縫い目が切れていた。
縫い目が雑なのが混じっていたせいもあるのだろう。
そして部室の電気を消し、鍵を閉める。

「ありがとう、手伝ってくれて」
小松が相変わらず小さい声で言った。
「いや、お礼を言わないといけないのはこっちだよ」
俺はなんか照れくさかった。
若干顔が熱い。
もしかしたら顔が赤くなっているのかも知れない。
あたりが暗くてよかった。

そして俺はカギを返しに行こうとしたところ、ボールで重そうに膨らんだ手提げカバンが目に入った。
ここはドラマとかでも必ず「重そうだね。カバン持とうか？」というべきシーンだ。
第一本気で重そう。
それでも頑張って平気そうに持っている姿がものすごく痛々しい。
俺は今ものすごい悪いことをしているのかもしれないとさえ思った。
ここで言わなければ男が廃る。
「カバン、持とうか？」
こんなの俺は初めてだ。
今までこんな経験はない。
正直恥ずかしいが俺は恋とかそんなの分からない、超「うぶ」な奴だ。
今すごいどきどきしている。
彼女は驚いた様子だったが、

「ありがとう」

と言ってカバンを俺に渡した。

その後俺達は一緒に帰った。

何話して言いか分からず、ほとんど黙っていた。

ただ、駅で方面が違うため別かれて向かいのホームへ歩いていく彼女の後ろ姿を見て思った。

これが恋の始まりなのだろうか、と。

ただ、俺は翌日川本先生の大目玉を食らった。

鍵を返しに行くのをきれいに忘れていたからだ。

恋は盲目とはこういうことを言うのだろうか？

俺の青春はいろんな意味で転がり始めた。

第１４話　恋の予感？（後書き）

なんか自分で読んでいても普通と言うかなんというか、あんまり面白くないです…。１週間かけて考えたのですがダメでした。まだまだ未熟者だということですね…。

第15話　プレイボール！

あれからしばらくして県予選開会式があり、俺達の試合の日が近づいてくる。
俺達はその間もずっと激しい実戦的な練習を続けていた。
練習が終わったら俺達は毎日ぐったりだ。
しかもだんだんと暑くなっていくこの季節、若干体調を崩しかけている奴も出始めた。
この前も村西が軽い熱中症になってしまっている。

しかし俺達は耐えた。
普通こんな弱小チームだと甲子園なんて無理だからこんな厳しい練習する意味ないし、と練習をサボったりする奴が出るもんだがそれがないのがすごいとこだ。
俺はこれは誇りに思ってもいいんじゃないかと思う。

さて、試合前日。
今日は最後の仕上げにシートノックやフリーバッティングをやる予定だったがあいにくの雨。
少々強くても外で強行する予定だったが強いどころではなかった。
バケツをひっくり返したような、とよく言うがまさにそれが当てはまる降りっぷりだ。
仕方なく教室に集まって明日のことについて話あったりしていたがしまいには大雨・洪水警報まで発令され部活を切り上げ早く帰宅するように言われたので俺達は荷物をまとめて家に帰った。
しかしこの憎い雨、俺達が駅に着いた途端急に小雨に変わり家に帰

る頃には完全に止んだ。
もう嫌がらせとしか思えない。
試合前日に練習が出来ないなんてかなり痛い。
俺はどうなるのかと不安な気持ちで星まで出てきた夜空を眺めた。

翌日朝、それはもう澄みわたった空の下俺は家を出た。
昨日の天気は一体どこへ行ったのだろうか？
天気予報を見る限り日本近辺に雨雲はない。
ったくなんだったんだあれは？

そして約1時間後、学校に着いた。
第3試合である俺達はそんなに急いでいく必要もないので一旦学校に集まってそれから行くことにしたのだ。
とりあえず学校で軽く練習をする。
キャッチボール、フリーバッティング、ノック。
これらをいつもよりゆっくりと念入りにする。

9時30分頃、全員揃って電車へ乗り込む。
俺達の球場は呉二河球場だ。
学校のある広島市から呉線に乗って呉駅まで行き、そこからはアップも兼ねて走った。
監督らは荷物を持って車だ。
ただし川本先生のみ俺達が迷子にならないように一緒に走っている。

俺達が球場に着いた頃には第2試合の大勢が決まっていた。
まだ2回表だったがすでに因島工業が福富に対し13点も打ち込みノックアウトしていたのだ。
このまま試合が進むと5回コールド、試合開始予定時間が早くなる。
俺達はすぐに準備に入った。

そして予想通り5回コールドで試合は終わり、ベンチに入るように指示が出た。
みんな何かしらの荷物を抱えてベンチの用意をする。
緊張した面持ちでバットやヘルメットを取り出す。
誰も喋らない。
この雰囲気はまずいなと思い大きな声で、

「キャッチボールに行こうぜ！」

と声をかけた。

「よっしゃ！元気出していこうぜ」

古谷がベンチを出る。

「おぉ！」

全員がグローブを持ってグランドに出た。

身体を動かして少しは元気が出たのか、キャッチボールの後はみんなごちゃごちゃ喋った。
相手のファーストが馬鹿でかいとか、セカンドの奴が有名人の誰かに似てるだとか本当にどうでもいい話だ。
今度は逆に少しは緊張感持てと言いたくなるような状態だった。
まぁでも緊張して固まるよりはマシか。

その後、両チームともにシートノックが5分ずつあり、ベンチ前に並ぶ。

「集合！」

審判の号令がかかる。
両チームがホームに駆け寄る。
倍近くある相手の人数、俺達に比べ圧倒的に高い背、威圧感たっぷりだがなんとなく相手の顔に緊張感・やる気がない。
完璧になめられてるな、そう感じた。

「これから二宮高校対八本松工業の試合を始めます。礼！」

「お願いします！」

今に見てろよ、相手を睨みつけ俺はマウンドへ向かった。

第１５話　プレイボール！（後書き）

すいません、更新が大変遅くなっています。これからもかなり遅れると思いますが気長に読んでやってください。１

お詫び

いつも拙作を読んでくださりありがとうございます。
大切なお時間を割き読んでいただいた読者様を裏切るようで大変申し訳ないのですが連載を一時休止させていただきたいと思います。
理由は現在もう一つ連載している話があるのですが両方を同時に進めるのは筆者の力不足により無理であることがようやく分かりました。
そのためもう一つの連載作に集中するためこのような措置をとらせていただいた次第でございます。
この話はいずれ再開、または一から書き直したいと思っております。
そのときはまた見てやってください。

最後に作者の勝手によるご迷惑を深くお詫び申し上げます。

以下の記号は気にしないで下さい。文字数が足らなかったため、　掲載できなかったのでそれに対する措置です。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3638d/

二ノ宮高校野球部奮闘記

2010年10月28日06時47分発行